やすらぎ

「歎異抄」（第四十回）

櫟暁講述

「歎異抄」第十六章

一　信心の行者、自然に、はらをもたて、あしざまなることをもおかし、同朋同侶にもあいて口論をもしては、かならず回心すべしということ。この条、断悪修善のここちか。一向専修のひとにおいては、回心ということ、ただひとたびあるべし。その回心は、日ごろ本願他力真宗をしらざるひと、弥陀の智慧をたまわりて、日ごろのこころにては、往生かなうべからずとおもいて、もとのこころをひきかえて、本願をたのみまいらするをこそ、回心とはもうしそうらえ。

（真宗聖典六三七頁）

今回の問題は、回心がテーマになっており、その回心ということについて、大変な誤解をしているお弟子がいるということを唯円大徳が批判して、その間違いを正している一ケ条である。

回心ということは、一体どういうことなのかということを、まず初めに申し上げてみたい。

真宗における回心ということは、如来の回向によって、つまり、南無阿弥陀仏のはたらきによって、常識生活に生きている我々が、信心に生きるようになるという、他力の信心に生きるようになるということを回心という。

「回心は回向心である。」と、私の師である曽我先生は云われた。

つまり、如来のはたらきかけによって翻る。如来のはたらきかけが、私に伝わってくださるおかげで、私の常識生活が翻る。これが回心であり、如来の回向心である。

それから、もう一つ大事なことは、回思向道。思いが翻って大道に向かう。自分の思いというものは、煩悩による妄念であり、そこには、我執、妄執の心が深く根差されている。そのような煩悩妄念の思いが翻って、本願の大道に向かうということが、回向である。如来のはたらきによって、我々が一大変革をする。人間が変わる。

「有漏の穢身はかはらねど　こころは浄土にあそぶなり」（『帖外和讃』）

とあるように、煩悩がいつも出てくるこの身体だけれども、その心は変わるということ。

如来をひとすじに信じ、本願を唯一の依り処として生きる。そういう心の変わり方。それで人間が変わる。如来を信ずる人間が出来上がる。

今まで自分の心と身体を信じて、自分で人生を決着しようとしていたものが、自分の力では自分の人生を決着は出来ないということがわかって、つまり、自力無効ということが頷けて、そして、如来の本願をただ一つの依り処として生きる人間になるということ。

これが、回心であり、一言で云うならば、一大変革ということである。

（当寺ご法話抜粋要約、文責副住職釈徹照）次回へ続く

光照寺寺報
発行所
真宗大谷派　弘興山
宗教法人光照寺
〒331-0821
さいたま市北区別所町102-2
電話：048-651-2781㈹
FAX：048-651-2753
E-mail
yasuragi@beige.ocn.ne.jp
ホームページ
http://www8.ocn.ne.jp/~koshoji
発行人　池田孝郎

修正会住職法話

報恩講櫟先生法話

子供会集合写真

春季彼岸会法要　三月二十日(金)午後一時三十分　厳修

詳細は三頁

旅行記

詳細は四頁

子供会報告

詳細は七頁

無碍光（むげこう）

―凡夫が仏になる法―

住職　池田　孝郎

今回は日本版ＮＳＣに於いて、秘密文章の公開の時期を三十年とするか、それとも六十年とするか等が議論されている中に、「歴史の検証に耐えるもの」という言葉が目に付いたものです。

そこで何を以て後世の歴史に於て真実と証明されるものかと疑問を自らに問いつつ考えてみることにしました。

そこでまず歴史とは何か。歴史の事実とは何か、歴史の真実とは何かと云う根源的な問いを問いとしなければならない程の気の遠くなる問題であると気付きます。抑（そもそも）、歴史とは何かについて考えてみた時、中学時代の歴史の先生が云われた言葉が思い出されました。「歴史とは有史以来を云い、文字に書かれたものを歴史と云う」と言う定義でありました。

しかし、今、私が歴史を定義するならば、「有史以前」も「歴史」と思う我がいることです。

何故ならば、今日の科学が証明した「Ｄ・Ｎ・Ａ」の解明です。この「Ｄ・Ｎ・Ａ」は生命が地球に誕生した時から今日までの進化のプログラムであり、又、設計図とも云われます。文字以前の生命の記録であり、生きてはたらいている、いのちそのものの事実です。

無機より有機へ。そして、有機より生命の誕生は隕石説か、雷説の電気的作用のストーリーであり、今だ生命の誕生は謎であります。

この宇宙に地球と同じ生命の存在する惑星は発見されていません。最初に誕生した生物が酸素を作り、その酸素によって空気の構成を以て我々生物が呼吸して生存している事実です。食物連鎖と共存とによって生命は進化発展して、今日の生態系を成しています。

その生命の根本は、食うか食われるか、敵か味方かの選択を間違えれば生命は存続し得ない宿命にあります。生存して来た種族が今日の地球上の生命でありましょう。

人間も同じであり、又、人間は肌の色、言語、慣習、習俗、宗教、文化、文明、国土、風土によって民族の歴史を綴り、語り伝え、文字に残して伝えて今日に至るのでしょう。そこに勝った負けた、取った、取られたを繰り広げ、喜び、恨み、復讐を誓い、正義を立て、神に誓い、神に祈り、戦術戦略を企て、権謀術数を巡らし今日の様相を呈しているのでしょう。

平和を願い、共存を願いながら戦争をしてしまう、人間の愚かさが露呈しています。

真実とはなんでありましょうか、事実とはなんでありましょうか。

私が憶えば、人間の自我（エゴイスト）でありましょう。個に於いても、集団に於いても、共同体に於いても、組織に於いても、国家に於いても、利益（りえき）が善となり、会社の利益、国家の利益が正統であり、正義になり、それを主張して勝ち取ることが最善となって、歴史は繰り返えされ繰り成されて今日も、又、未来へも進んで行くのでしょう。

人間の罪業性に目覚め、慚愧（ざんき）、懺悔（さんげ）しなければ救われない存在です。もし歴史の検証に耐え得る教えがあるとすれば、私はハッキリと答えます。それはお釈迦様の仏法に説かれて既にあると。　合掌

真の依り処

尾崎豊の歌でぼくの夢は私は私でありますように、何をしたいかわからない、君が君であるためにそういう人生秘密秘密。何んと素晴しいが胸がひきさかれるような詞です。人は誰でも人として歩むなかでこれで良いのかしらと悩み立ち止まる時があるかと思います。

やり直しのきかない人生ではありますがその場で見直すことが出来ます。親鸞聖人は悲泣せよといわれています。悲しみは悲しみのまま、つらいことはつらいまま泣くことによって大いなる阿弥陀様の大悲によって自分を超えたものに出遇えます。それは廣大無碍の世界この世にあって一番幸せな処自分の居場所を与えて下さいます。私が私で良かったという最高のものを頂けるのですと宗祖親鸞が教えて下さっています。南無阿弥陀佛

岡田ノリ子

鈴の音

仏教にいちばん大事なのは言葉に感動すること

安田　理深

（『安田理深集（下）』）

お彼岸

彼岸とは私たちの生きている世界を「此岸」（此の岸）というのに対して、「彼の岸」と云います。私たちの生きる娑婆は苦しみ悲しみのまっただ中です。苦悩を超えていきたいと願うこころから生まれたのが「彼岸」だと云えます。

亡き人は生きている私たちに、生老病死の身の事実を教えて下さった諸仏です。苦しみ悲しみの只中で生きる私たちに、苦悩を超える阿弥陀様の浄土を念ずることが願われています。苦しみや悲しみ、或いは、迷いはなくなりませんが、それを抱えて生きていく力を賜るところに私たちは生きられます。空しくない人生を生きて欲しいと念じて下さっている仏の願いを感じていきたいです。

如来の本願に尋ねて参りましょう。

日本特有のお彼岸週間は亡き人に憶いをはせて「いのち」の道理を深く尋ねる機会です。

亡き人を偲びつつご一緒にお念仏しましょう。

副住職（釈徹照）

春季彼岸会法要

- 3月21日（金）春分の日
- 午後1時30分
  ～3時30分まで
  （1時受付）
- 光照寺本堂にて
- 勤行・法話

※準備の都合上、出席人数をご連絡下さい。預骨されている方は率先してお参り下さい。
ご参詣をお待ちしております。

彼岸参り

- 3月18日（火）
  ～24日（月）の期間
  （但し21日は除く）

※ご希望の日にちをお知らせ下さい。時間につきましてはこちらで調整させて頂きます。ご自宅か当寺のいずれかで読経いたします。

親鸞聖人と五葉松を背景に

光照寺本堂南側の土地に建立された親鸞聖人銅像の両脇に、五葉松を一対、銅像の斜め背後に三波石、石碑（無碍の一道）を葵石材遠藤茂夫社長に御寄贈頂きました。感謝状と記念品千手観世音菩薩像を贈呈しました。（上記写真：右から遠藤社長、住職、池田総代、副住職）

念仏者無碍一道也の碑を背景に

（右記写真：右から住職、坊守、遠藤社長、池田総代）

ひとくち歎異抄

羅漢：人間のまことの教えはどこにあるか

「弥陀（みだ）の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教、虚言（きょごん）なるべからず。」第2章

弥陀（みだ）の本願、釈尊、善導（ぜんどう）、法然（ほうねん）、親鸞（しんらん）の法灯にまことがある。

川越喜多院の五百羅漢

光照寺、旅行記

平成二十五年九月二十八日～二十九日『光照寺旅行　袋田の滝・奥久慈と親鸞聖人の関東布教の起点西念寺へ』と題して茨城県へ旅行しました。幹事長川澄氏、幹事淡海氏、谷口氏。参加者の方々の感想をお寄せいただきました。皆様にこの紙面をお借りして御礼申し上げます。

（編集長　副住職池田孝二郎）

【旅程表】

一日目
光照寺→龍神大吊橋→大子ブルワリー（昼食）→法龍寺→袋田の滝→袋田温泉「思い出浪漫館」宿泊

二日目
ホテル→西念寺→すぎのや（昼食）→笠間日動美術館→陶芸美術館→水戸ドライブイン（お土産）→光照寺

奥久慈と笠間の旅

川　澄　英　明

まず、皆様のご協力で、スケジュール通りの楽しい旅行が出来ました事を心からお礼申し上げます。

今回は親鸞聖人ゆかりの二つのお寺を訪ねました。光照寺の旅行では平成十七年に願入寺、善重寺、笠間光照寺、西念寺、真仏寺、上宮寺、阿弥陀寺、常福寺、光明寺、報恩寺の十ヶ寺を、平成二十一年には願船寺と、今まで沢山の茨城のお寺に参詣できたことを、大変嬉しく思っています。

今回の旅行の初めは「袋田の滝」から計画を始めたのですが、私は以前から奥久慈の渓谷にかかる大きな吊り橋の美しい風景が気にかかっており、これはチャンスと思って行程に加えました。深い渓谷を挟んだ緑の山間にかかる大吊り橋。訪ねてみると見上げるような橋塔とビクともしないコンクリートの幅広い橋桁。日本一の歩行者専用の吊り橋なのです。期待を上回る迫力に圧倒されました。その後、度々テレビの茨城観光シーンには、この龍神大吊橋がアップで映し出され、行って良かったなあと思っています。ここは奥久慈の深い自然のなかのハイキングコースの一部です。経済効果なんて考えられません。よくもこんな巨大な施設を山奥に造ったものだと、不思議でなりません。

この旅行で良かった事はもうひとつ。

龍神大吊橋にて

ホテルの宴会で、参加者全員がそれぞれ三～五分のスピーチで近況や趣味の事などを熱く話された事です。この皆さんのお話は一時間半にも及び、興味深く聞く事が出来て楽しいひとときとなりました。

法龍寺にて1

布教の地を尋ね思う事

淡　海　雅　子

史実を証明することは残された文献に頼らざるを得ないが、如信上人の東国での記録はほとんど残っていない。

親鸞聖人が善鸞義絶という判断をせざるを得なかった事態が関東で起こっていたことは『歎異抄』で述べられている。このような地で如信上人はどのように生きられたのか。そして「三代伝持」という根拠を顕かにされた覚如上人の記述をどのように考えればいいか。このような課題を抱えての旅行だった。

親鸞聖人の教えは様々なフィルターにかけられ現在に伝わってきている。本来は真実に目を向けなくてはならないが、歴史的解釈それ自体を自己の範疇で模索し、良し悪しを言っている私がいた。これこそが親鸞聖人が嘆かれた根源であろう。

合掌

はじめての光照寺旅行

谷　口　正　司

毎年のように光照寺旅行を誘われていましたが、敷居が高いとの思いなどがあって参加を見送ってきましたが、実にひょんなことから、今年の旅行に参加することになりました。

お寺の旅行自体が初めてであり、少々不安もありましたが、普通の旅行と大差なく、家族的な雰囲気の中で、旅行を楽しむことができました。

最終日には、大宮アルディージャのグッズを賞品として、ビンゴ大会（ちょっと大げさ?）を車中で実施し、参加された方から「面白かった」とのお声かけを頂き、大変嬉しく思いました。

【来年（も?）は、早めに大宮アルディージャへの声かけを行い、皆さんに喜んでいただける（?）賞品が準備できたらいいなと思っています。】

台風20号の影響も危惧されましたが、幸いにも足早に通り過ぎてくれて、出

法龍寺にて堀川氏のお話

発当日は快晴に恵まれて、無事旅行を終えることができました。

まだまだ、真宗門徒としては新人の私ですが、今後も精進していこうとの気持を高めてくれた旅行になったように思います。

今回の旅行は、幹事の一員としての参加でしたが、幹事としての務めも十分果たすことができなかったのではないかと反省していますが、皆様のご協力により無事旅行を終えることができましたことを深謝いたします。

御同朋の皆様、ありがとうございました。

法龍寺にて２

聖人を偲び、関東の原始教団を憶う

住職　池田孝郎

茨城のご旧跡を尋ねる旅は光照寺旅行として度々訪れている。

今回の旅行の眼目は如信上人のご苦労の足跡を尋ね、本願寺教団の形成の原点に触れた思いでありました。

親鸞聖人を宗祖とし、第二代の如信上人、第三代の覚如上人を通じて、聖人が関東布教の二十年間のご苦労と、その後の血脈の方々の法燈のご苦労でありましょう。

袋田の滝にて

如信上人の法龍寺を尋ね、筑波大学の今井雅晴教授の本を買い求め、読んで感動致しました。

今井教授は、関東の原始教団を聖人没後、一、専修念仏の集団、二、賢善精進の集団、三、造悪無碍（本願ぼこり）の集団に分かれていたと指摘されている。それは今日も同じと頂いたことです。

南無阿弥陀仏。

合掌

光照寺バス旅行に思う

坊守　池田邦子

九月二十八日（土）すっきりと冴えわたった秋空、旅行日和に恵まれた朝、最初の訪問先茨城の法龍寺へと八時半役僧の伊東さんに見送られながら元気に出発。歴史性、物語性を持つ如信上人御廟を尋ねました。今年の旅行は、芸術の秋の先取りをした思いがしました。皆様と共に楽しい旅行が出来ました事に感謝申し上げます。

関東布教の地を訪ねて

池田孝次郎

今年も五歳になる双子を連れ参加させて頂きました。親鸞聖人の孫如信上人御廟所法龍寺を訪ねた。何故如信はこの地で終焉を迎えたのか疑問が湧いた。如信は幼少から青年期まで京都の祖父親鸞のもとで育ち、父善鸞は如信が生まれて間もなく関東に赴いているようである。その後再会したのか記録はない。義絶後の善鸞が関東で山伏となっていたという説がある。如信は第二世を継いでも京都には還らなかった。ひょっとしたら山深いこの地で父善鸞との再会を祈念していたのではないだろうか。笠間の西念寺は親鸞が四十二歳より布教された地と伝わる。偶然にも小生は今年で四十二歳になった。当時の親鸞聖人に思いを馳せ感慨深く参拝させて頂きました。光照寺並びに幹事の皆さまには大変お世話になり有り難うございました。

宿にて

西念寺山門前

稲田御坊　西念寺

佐々木　玄吾

このお寺は懐かしい。平成二年八月、このお寺で細川巌先生より三日間、「正像末和讃讃仰」のお話をお聞きした。それは後に法蔵館より『晩年の親鸞』として出版された。

お寺は再建されていた。本堂では見覚えのある御住職が聖人の関東での布教の困難の様子と山伏弁円が仏教へ帰依された物語を話して下さった。御伝鈔下に「上人左右なく出であひたまいけり」とあったのを思い出した。害心を持った山伏弁円が聖人のお弟子となり明法房弁円となって聖人のお仕事を支えられたのである。遠い昔の話を今よみがえらせるお寺である。

西念寺本堂前にて

懐かしい西念寺

佐々木　文子

このたびの旅行で聖人の関東での布教の地・稲田の西念寺を訪ねることができて嬉しかった。

西念寺住職の法話

二十三年前に、本部夏期講習会と東京支部三十五周年の記念聖会で、大変お世話になったからである。

あの後再建された立派な本堂、びっしりと実を付けたお葉付きイチョウの大木、高い木々が鬱蒼と茂った参道、威厳ある茅葺の山門が懐かしい。本堂でご住職の法話を頂き、現在の坊守様にもお会いできてお礼を申すことができた。

当時の色々な出来事を通してこの会座で、称名念仏の大切さを具体的に教えていただいて、念仏申しながら台所を担当させて頂いた。

聖人ゆかりの地を再び訪ねて、中国の玄中寺や香積寺、インドのルンビニーやブッダガヤへの旅が思い出されて、ご恩徳の歴史を憶念させて頂く。

御同朋の皆様とこうして聞法の旅ができる幸せをかみしめている。大変お世話になりました。

袋田の滝

平山正三

袋田の滝は、茨城県の久慈川の支流にある高さ百二十m、幅七十三mの滝で四段になった巨大な岩肌を白糸のように流れ落ちており、下から見ると三段に見え、上の第二観瀑台から見ると四段になっている。

冬になると凍りついた滝で有名であるが、第二観瀑台に昇るエレベーターホールに貼ってあった四季のポスターで見た滝は、秋の紅葉時が最も良いように思えた。

今回の旅行は、紅葉には少し早かったのが残念であった。

また、龍神大吊橋も見事な紅葉となるであろう。来年以降（鬼に笑われるかな?）の紅葉時に再度行って見たいと思っている。

常陸に旅行して

藤原自雄

私が最初に光照寺の旅行に参加させていただいたのは一昨年の〝東北平泉の旅行〟でした。今でも〝東北平泉の旅行〟はとても印象深い思い出として記憶に残っています。今年の夏に妻と2泊3日で東北旅行をしました。最初の2日間はお寺の旅行とほぼ同じコースを回りました。季節に違いはありましたが、これも良い思い出となっています。

今回の旅行は二度目の参加になります。「今度はどんな旅行になるのかな?気に入ったら妻と一緒に再度旅行してみようなどと思ったりして、半ば〝下見を兼ねて〟の参加でした。私にとって常陸(茨城)は、これまで縁がほとんど無く、まさに〝近くにありながら遠い国〟でした。その様な訳で、まるで子供のようにワクワクし、楽しみにしておりました。そして実際に足を踏み入れて感じたこと、それは私の故郷である島根の景色にそっくりだということでした。山間部に点在する家々や田園を眺めながら、束の間、懐かしくホッとした気分に浸ることができました。

西念寺にて

バス車中ビンゴ大会

旅行でお参りした西念寺と法龍寺は、そうした穏やかな風景の中にありました。親鸞聖人と縁の深い西念寺、そして如信上人と縁の深い法龍寺、お二人が生活を営まれ、布教の拠点とされた地に建つ寺。境内の銀杏の巨木を見上げ、時の長さと重みを改めて感じました。一方。時を経ても、自然を残した周りの風景の中に当時の様子を偲ぶことができるはずだ…。最も変わらぬものは日の光や風の匂い…。今、私が感じている光と匂いは当時と変わっていないはずだ…。お二人はこの地で、どのような思いで日々を過ごしておられたのだろうか…。そんなことを考えていると、まるでタイム・スリップしたような気分になり、思わずジンとこみ上げてくるものがありました。

お陰さまで穏やかな気持ちで、楽しく充実した時間を過ごさせていただきました。旅行幹事の皆様をはじめ、共に旅行をさせていただいた皆様には色々とお世話になりました。ありがとうございました。

今回の旅行で〝常陸は近い国〟になりました。是非、妻と一緒に〝親鸞めぐり旅〟をしたいと思っています。もちろん袋田の滝は外しません。そして泊まりは袋田温泉です。

合掌

如信上人御廟所法龍寺をたずねて

三輪民子

如信上人は東本願寺の第二代、親鸞聖人を祖父に善鸞を父に京都で誕生されました。幼いときから青年時代に至るまで親鸞聖人のお近くで、念仏一筋に生きる姿に接して育たれました。聖人にこんな素晴しい孫がおられて、善鸞を義絶しなければならなかった苦しみを思う時いつも胸が痛みましたが、孫である如信上人がおだやかな性格で多くの人々に感銘を与え報恩講教団といわれる宗門の原型を創られたことを知り、如信上人七百回忌法要がおこなわれた法龍寺をたずねることが出来て本当に嬉しく感銘を受けました。

いい企画の良い旅行でした。

休憩中

子供会報告

子供会「ポニークラブ」
子供報恩講

坊守　池田邦子

十二月二十三日（月）小人十一名、大人十九名の参加を得て、子供報恩講が勤修されました。子供達それぞれの調声のパーツを受け持ってもらい、一年経っての成長が感じられました。紙芝居、陽子さんの法話、お斉（お好み焼き、おでん、手作りケーキには子供達がトッピングのお手伝い）手作り輪なげと盛り沢山の次第でした。最後には、九月に当寺御門徒さん達とのバス旅行の際ビンゴゲームで楽しんだのを思い、谷口さんが再度子供達の為に用意して下さいましたビンゴゲームで大いに盛り上がりました。初参加の大人の方もいらっしゃいました。抵抗なくお寺で過ごす事が身について行かれると、スタッフも企画するのにうれしくなります。御婦人方、皆々様のお手伝いに感謝致します。

みんなでカルタ

お母さんと一緒に

輪なげの様子

坊守の紙しばい

お好み焼美味しかった

楽しかったビンゴゲーム

お父さんと一緒に

お知らせ
―寺務所より―

◆法要のご案内

●春季彼岸会法要　三月二十一日（金）、午後一時三十分より厳修。

◆光照寺護持会

会員の方は護持会費の納入をお願い致します。又、随時新会員受付中。別紙案内をご覧下さい。総会は六月二十九日。

◆聞法会のお知らせ

●親鸞聖人のみ教えに聞く会

櫟先生が療養中の為、日程は決まり次第ご案内致します。

●大経の会

三月一日、四月十四日、五月十一日、午前十時～午後三時まで。細川巌著正信偈讃仰（四）を学んでいます。お弁当持参して下さい。

●我聞の会

三月十二日、四月二十二日、五月二十日、午後二時～四時まで。講師は住職。『真宗の簡要』（住職著）、サブテキスト「無量寿経に聞く」（松原祐善著）を学んでいます。

●微風学舎

毎月開催。午後七時～九時まで。講師は副住職。「顕浄土」の教学・親鸞における現生不退の視座・（副住職著）、サブテキスト「今日のことば」、「真宗の生活」を学んでいます。日程は寺にお尋ね下さい。

◆さいたま親鸞講座

午後二時～四時。会場は大宮川鍋ビル。四月十九日、六月十四日。

◆真宗に学ぶつどい

午後一時三十分～四時。会場は埼玉組の寺院。講師は武田定光先生。四月十日。参加の方は当寺にご連絡ください。

◆お願い

ご自宅で法事の際は駐車場をご用意下さい。

住所・電話番号変更の際は必ずご連絡下さい。

俳句・川柳

吉澤　光昭

くちびるに紅差し指の初仕事
お降りの傘にふれるる軽ろさかな
干支山行明けて初登や馬不入山

西木　順子

だしぬけに閉園の曲山羊鳴けり
小寒の棘のきわだつバラの幹
しくらめん寒夜の耳をそばだてる

江部　鴨村

山笑ふ
おのずから声明揃ふ修正会
初ゆめは獏に食れてしまえけり
窓の陽を子の手がつつむ福寿草
塩餡大福よく売れてをり町小春
身を貞し忍月の川流れゆく
傘かざし雪泣くといふ母の顔
弘興山凡夫浄土と雪つもる
みちのくの生きているぞと山笑ふ

山田　恒

八十路坂地球が速く回り出し
妻の住む瞬く星に生かされる

釈　義深

一山を越えて望むや富士の山
子ら集う広場に建つや親鸞像
見てやるぞ、オリンピックを念仏す

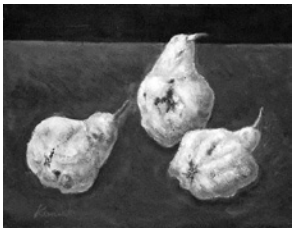
短歌（詩）

佐藤　セツ子

七回忌
もう一度能登に行きたしと言いし息子よついに果せず七回忌ぐる
仏前に一日も花を欠かさずに今日は息子の七回忌なり
昼も夜も遺影に優しく声かける生前よりもずーっと優しく
あふれ咲く程に盛られし花籠の仏間に置かれ勤行となる
はらからの集いし席に君は亡くしめやかに七回忌終る

篠原　潤子

函館のヨネ伯母さんの手作りの布ぞうりはく有難くはく
おじさんと二人で仲良く布ぞうり編んで下さる亡母の妹
帰省時に立ち寄る函館伯母の家魚貝のおかづ作って下さる
初めての卓を囲んでジャラジャラとマージャン大会義父と夫と娘



山田　邦興　画

梵鐘

報恩講が今年も無事勤められ、快復された櫟先生が会座をお勤め下さった。

御法話のテープを起こさせていただきながらこの何年か、先生のお言葉の端々から「わかってくれよ。私も若くないのだから」という願いが聞こえていた。しかし私は聞不具足の邪心を離れられず、また聞かせていただけるのだという勝手な甘えと身勝手な聞き方をしていた。病を克服し御領解がさらに深化された先生のお言葉に歎異抄の九章を深くいただいた。如来を仰ぎみられる喜びを感じ、私自身の在り様に目を覚まさせていただいた。

一期一会の出会いはいつも緊急事態なのだ。『今でしょ。』この御縁に感謝申し上げたい。

南無阿弥陀仏　釈尼雅亮